

基調講演

(共催：久光製薬株式会社)

8月3日(土) 11:00～12:00 第1会場(伊藤謝恩ホール)

座長：田中 栄 東京大学大学院医学系研究科 整形外科学

ロコモティブシンドローム —立てる・歩けるは健康と自立の源—

○中村 耕三

大坪会東和病院

ロコモティブシンドローム(運動器症候群、ロコモ)は運動器の障害によって「立つ、歩く」機能が低下した状態を言う。進行すると要介護リスクが高くなる。運動器は運動を実施する器官の総称で、身体を支える骨や、動く部位である関節(軟骨)や椎間板(髄核)、骨格を動かすための筋肉が含まれる。これらの障害は痛みや、関節可動域制限、筋力低下などを来し、それらが複合しながら歩行機能の障害につながる。ロコモ対策は「立つ、歩く」機能低下が他の日常生活機能低下よりも早期に出現することに注目し、その早期発見と改善のための早期介入を目指す概念・対策である。対象は人生100年時代をみすえる観点から、高齢者だけでなく若年成人を含んでいる。長寿社会の到来という新しい社会環境の中で、類似概念であるフレイル(老年症候群)との異同にも触れながら、ロコモ対策の実際と、その意義について述べる。

特別講演

(共催：ノーベルファーマ株式会社)

8月2日(金) 17:00～17:50 第1会場(伊藤謝恩ホール)

座長：田中 廣壽 東京大学医科学研究所附属病院 抗体・ワクチンセンター 免疫病治療学分野

疾患特異的iPS細胞を活用した病態解析と創薬

○戸口田 淳也

京都大学 ウイルス・再生医科学研究所／iPS細胞研究所

iPS細胞の医療応用の1つが、遺伝性疾患患者から樹立したiPS細胞(疾患特異的iPS細胞)を活用した病態解明から創薬への応用である。iPS細胞から病態の責任と想定される細胞を分化誘導し、患者で観察されている表現型をin vitroで再現することで分子病態を明らかにし、更に創薬のためのアッセイ系を構築するという応用である。戦略面において重要な点は臨床病態から責任細胞あるいは責任分化過程を正確に理解し、それに応じた分化誘導系を確立する事である。骨疾患においても、FOPのように未分化間葉系細胞を標的とすべき疾患とI型コラーゲン遺伝子の異常を原因とする骨形成不全症のように骨芽細胞を標的とすべき疾患があり、それぞれに対して、適切な誘導系とアッセイ系を用いることが重要である。講演ではこれまでの成果と今後の展望を紹介したい。